

妻に傷害を負わせて逮捕された夫が、

「自分の妻を殴ってなぜ悪いのか」と警察でうそぶいたという。彼にとつて、妻は「自分のもの」であり、自分のものをどのように扱おうと、余計なお世話であつたのだ。妻が自分は夫に所有されていると実感する場面の一つが、夫から性的暴力を加えられるときだ。性的暴力には、性行為の強要、避妊への非協力、中絶の強制やポルノと同じ行為の強要などさまざまな形態がある。いずれも、性関係の持ち方について、妻の意思が問われず、無視され、ただ夫の性的欲望の充足だけが追求されている。妻が意思を持った一人の独立した人間であることが、一顧だにされていない。「夫から私は物のように扱われた」と述懐する妻の言葉が、そのことを語っている。性的暴力は、多くは身体的暴力や精神的暴力と結びついており、妻は幾重にも、人間であることを否定される。妻が人間として生きたいと切望するとき、離婚という解決策が浮かぶが、生活をどうするか、子どもをどうするかという次の難問が待っている。ある若い女性は、夫の暴力に耐えかねて一度は別居したものの、母子家庭で生きることの厳しさから、離婚に進めないでいる。実際、この社会は、女性が一人で生きていることに、極めて冷たい。この現実が、男性の女性に対する支配を正当化し、女性に暴力に耐えることと引き替えに、生活の安定に甘んじるようにささやく。それでも人間らしい生活をと、離婚した多くの女性たちは、歯を食いしばって闘っている。

人間を支配することを 否定する社会へ

女性を暴力で支配することが可能なのは、暴力を振るう男性の個人的な問題を越えて、彼にそのような行動を許している社会の根本的構造である。もちろん、暴力を振るう個人の問題はある。しかし、社会全体が、そのことを是とし、可能にする仕組みをとり続ける限り、個人を非難したり、処罰するだけでは問題は解決しない。同様に、被害を体験している女性に援助の手を差しのべることは重要であるが、それだけでは解決しない。シェルターをいくら作っても、シェルターの外の社会が変わらない限り、いたちごっこになるだけである。

今あるいわゆるDV防止法は、ドメスティック・バイオレンスをなくすという観点からは、極めて限定的な効果しか持っていない。既に発生している配偶者による暴力から被害者を守ることで、一定の役割をはたしているが、それだけでは不十分である。法律ができてから、確かにドメスティック・バイオレンスは、犯罪であるという認識は広まったし、警察も以前とは違って、被害者の保護に力

を入れた。しかし、暴力にさらされている女性は、夫が逮捕されたり、保護命令をもらつても、それで、直ちに一人立ちして安全な生活を手に入れることができるわけではない。8月25日付けの新聞は、北九州と静岡県で、ドメスティック・バイオレンスの加害者が妻を殺害したり、重傷を負わせたという事件を報じていた。北九州の事件は、離婚調停中であつたし、静岡県の事件は離婚後であつた。いずれの夫もその後で、自殺している。このような夫には、保護命令も無力である。現行法での対応の発想の限界を見せつけられた思いがした。

男性が優位であり続ける社会を保っている限り、暴力による女性

への支配は終わらない。男性の優位性は経済力に裏打ちされていることが多いが、必ずしもそれに限らない。妻の経済力や社会的地位が自分より高いということでは、暴力行為に及ぶ男性がいる。男が上でないければならないという彼の信念を、家庭の中での暴力で実現しようとするわけである。そこで、根本的な問題は、暴力の根源にある男性優位社会を、男女平等な社会にどう作り変えて行くかにある。

1979年、国連が女性差別撤廃条約を採択し、日本は1985年にこれを批准した。この条約は、女性への差別の根源に性別役割分業があることを指摘し、その撤廃を求めている。男女を性によつ

相談してみてください

夫婦・恋人間の暴力で悩んでいませんか。
親密な間柄であっても暴力は許されないものです。
一人で悩まず身近な機関に電話してみてください。

- 東京ウィメンズプラザ 03-5467-2455 毎日(年末年始を除く) 9:00~21:00
- 東京都女性相談センター 03-5261-3110 月・金・土・日・祝日 年末年始を除く 9:00~20:00
- 東京都女性相談センター立川出張所 042-522-4232 月・金・土・日・祝日 年末年始を除く 9:00~16:00
- 警視庁生活安全相談センター 03-3581-4321 月・金・土・日・祝日 年末年始を除く 8:30~17:15
- 田無警察署生活安全課 0424-67-0110 8:30~17:15

DVなど、上記の相談時間以外の緊急相談の場合は
東京都女性相談センター 03-5261-3911

て、社会的な役割を割り振り、そこに固定化することで性差別が作られ、維持されてきていることが明らかにされた。この仕組みが、暴力の根本構造であることは、その後、女性たちを中心にした運動でより明白にされてきた。難しいのは、私たちはみんな生まれたときから、性別役割分業社会に生きていることで、その問題点が見えにくいことだ。まるで空気を吸うように、性別役割分業のさまざまな実態を受け入れている。男が強い・偉いという考え方は、子どもの時から、教えられるまでもなく、吸収してきている。最近、ようやく、学校の名簿でのボーイズ・ファーストが改善されつつあるもの